早稲田大学大学院日本語教育研究科

修　士　論　文　概　要　書

論　　文　　題　　目

二要素複合名詞アクセントの習得における意味関係についての意識

―中国人日本語学習者を対象に―

張　明天

２０２２年３月

本研究は、中国人日本語学習者の複合名詞アクセントの習得状況を明らかにする上で、学習者の複合名詞アクセントに関する意識を明らかにすることを目的とする。そのため、学習者が複合名詞の生成と知覚の調査を通し、学習者の習得状況を明らかにした上、インタビューを通して学習者の複合名詞の前部要素と後部要素の意味関係に関する意識が習得にどのような影響があるのかについて考察した。以下、本論文の流れに沿って、概要を記述する。

第1章　序論

第１章では、筆者の問題意識、研究背景、研究目的と本論文の構成について述べた。

本研究の問題意識は、筆者の日本語学習者としての複合名詞アクセントの習得経験から気づいたものである。筆者は日本語を学習する時、「中華（ちゅうか）」と「料理（りょうり）」[1]が複合すると「中華料理（ちゅうかりょうり）」になり、アクセントの変化に気づき、その後、「大義（たいぎ）」と「名分（めいぶん）」が「大義名分（たいぎめいぶん）」のようなアクセントが変化しない語も気づいた。なぜアクセントが変化する複合語と変化しない複合語があるのかと疑問を持った。

この疑問を持ちつつ、日本語教育を専攻とした。数多くの文献の中、窪薗（1987）を読んだ後、複合語は意味制約という規則があることを知った。しかしながら、日本語学や日本語教育の関係者でないと、この規則を知っている学習者は少ないと考える。学習者にとって意味関係への意識が複合語アクセントの習得に影響があるではないかと考え、複合語の意味関係の意識と習得の関係について問題意識を持つようになった。

近年、中国においての日本語学習者数が増加と伴い、中国人日本語学習者を対象とした音声教育の問題も多く指摘された。特に漢字圏の学習者であり、母語からのアクセントに影響する傾向が見られる。このような背景をもとに、筆者は中国人日本語学習者の複合名詞アクセントの習得状況、また、中国人学習者は複合名詞アクセントをどのように習得しているかについて関心を持った。

これを解明するために、中国人日本語学習者である調査協力者を募集し、知覚と生成

[1] 本稿では、秋永（2014）の表記法に従い、高く発音する部分は「—」で示し、アクセント核の部分は「¬」で示す。

の調査を経て習得状況を把握し、インタビューを通して、得たデータを量的と質的分析二つの方面から学習者の複合名詞アクセントに関する具体的な意識を可視化することを試みた。この目的を達成するために、以下 4 つのリサーチクエスチョン（以下、RQ）を設定した。

RQ1：学習者の複合名詞アクセント生成と知覚の習得状況はどうなっているのか。

RQ2：学習者は複合名詞アクセントをどのように判断しているのか。

RQ3：学習者は複合名詞アクセントを判断する際、前部要素と後部要素の意味関係について意識しているのか。

RQ4：学習者の意味関係についての意識が複合名詞アクセントの判断にどのような影響があるのか。

第2章　先行研究

第 2 章では、本研究と関連するアクセントの規則と習得の理論と実践研究を整理し、本研究との関連性について述べた。

まず、長野（1995）、高見澤ほか（2004）、秋永（2014）がアクセントの定義と分類、共通語の一般的な規則について概説した。次に、複合名詞のアクセントについて、窪薗（1995）、田中・窪薗（1999）がまとめた後部要素の特徴による規則：複合語アクセント規則（Compound Accent Rule: CAR）について述べた。

しかし、このような規則に反すると見られる語は存在しており、CAR も全部の複合名詞が従うわけではない。窪薗（1987、1995）、松森ほか（2012）はこのような語を加えて広義の複合名詞アクセントの分類方法を補充した。窪薗（1987）は複合語を複合化複合語（以下、CW と略す）と非複合化複合語（以下、NCW と略す）の二種類に分け、「意味制約」という規則を定義し、前部要素と後部要素の特定の意味構造により、CAR の適用を阻止することについて紹介した。

次に、中国語母語話者を対象とした複合名詞アクセントの習得研究をまとめた。柳（2008）、劉（2011）、陶（2016）、の研究により、漢字圏以外の言語より母語・母方言の

影響を受けやすい傾向が見られた。

前述のように、複合名詞を構成する単語間の意味関係についての研究は、日本人母語話者を対象とするものが多く、日本語学習者を対象とする先行研究は殆どない。中国人日本語学習者の複合名詞アクセント習得研究ではCARの一般的な規則についての指導法の研究はあるが、意味制約について殆どふれていない。故に、本研究は、中国人日本語学習者の複合名詞アクセントの習得状況とその複合名詞を構成する単語間の意味関係についての意識を検討し、学習者が複合名詞アクセントを習得する際、語の意味上の理解が複合名詞アクセントの生成と知覚にどのような影響を与えているかを解明することを目的としている。

第3章　調査方法

第 3 章では、調査の手順、調査協力者、調査方法と分析方法について記述した。

まず、調査は 3 つに分けられている。調査 I と II では、中国人日本語学習者の複合名詞アクセントの習得状況を明らかにするために、CW と NCW 語 20 語ずつ選出し、20 名の調査協力者に生成調査を行った。その調査の正答率を統計し、統計分析で各種類の複合名詞の生成と知覚においての習得状況を分析した。そして調査Ⅲのインタビュー調査の事前調査としてアンケートを回答してもらった。

調査Ⅲのでは、20 名の協力者から 4 名を選出し、半構造化インタビュー調査を行った。質問の内容はアクセントの習得経験、生成と知覚調査で出現した複合名詞のアクセントの判断方法などであった。インタビューデータは、SCAT 分析により、各協力者のストーリーラインをまとめ、抽出されたテーマ・構成概念をカテゴリー化した。

第4章　調査結果と分析

第 4 章では、調査の結果の分析について述べた。

まずは正答率の度数分布図で協力者の習得状況を概観した。

次に、調査協力者が複合名詞の生成と知覚、CW と NCW の間に差別があるかどうかを明らかにするために、主に生成全体と知覚全体の比較、生成 CW と生成 NCW の比較、

知覚 CW と知覚 NCW の比較、生成 CW と知覚 CW の比較、生成 NCW と知覚 NCW の比較という 5 つの分析を行った。その結果、知覚と生成の間では、複合名詞全体においての習得は差が見えなかった。CW と NCW においての習得も知覚と生成の習得の差別も見えなかった。CW と NCW の間では、習得状況の差が見えた。知覚場面でも生成場面でも、正答率の差が有意と言えるという結果が現れ、どの場面でも、NCW の正答率は CW より有意に低かった。

最後に、インタビューデータの SCAT 分析で、協力者 A、B、C、D のストーリーライン、理論記述を記述した。テーマ・構成概念のカテゴリー化をし、主に＜発音学習＞と＜発音を判断する方法＞二つのカテゴリーでテーマ・構成概念をまとめた。生データを合わせた考察は、第 5 章に繋がった。（テーマ・構成概念は【】、下位カテゴリーは［］、カテゴリーは＜＞で示す。）

第5章　インタビュー分析の考察

第 5 章では、前章の SCAT 分析で抽出されたテーマ・構成概念を協力者のインタビュー資料と合わせて、具体的な考察を行った。

A は既に高度な日本語音声知識を把握しており、複合名詞アクセントを判断する際、自分が長年積み上げた日本語の語感と経験を活用し、自分なりの複合名詞アクセントの規則を形成している。まず自分が熟知しているかどうかを確認し、熟知している語のアクセントはすぐ判断できる。接触の頻度が少ない語の場合は、類義語から推測する。推測できなければ、語を分割し、各部分の意味の結束性から推測し、アクセントを判断する。

B は日本語の発音知識を獲得し、自分の持っている音声知識で複合名詞のアクセントを判断することができる。アクセントを判断する際、「全体性」という概念が生成した。母語の影響、連濁などの要素で複合名詞の「全体性」を判断することにより、アクセントを判断している。その他に、語感や自分の経験も活用され、各条件を総合的に考慮してアクセントを判断することが観察される。

C は独学で日本語を習得した過程で、発音に関する明示的知識はほとんど獲得していなく、複合名詞のアクセントについてほとんど全部語感で判断した。英語のような「スト

レス」を日本語に適用し、自分の複合名詞アクセントの判断を解釈しているが、例外と扱われることが多く、解釈できない場合もあった。

D は日本語学習の過程で、発音についての学習は欠けており、語感で複合名詞アクセントを判断しているが、実際「0 調」のようなアクセントについての知識を持っている。複合名詞アクセントを判断する際、D は「0 調」「1 調」などの調の変化で解釈しているが、変調の規則や理由はやはり語感による「異常感」というものであった。

第6章　総合的考察

第 6 章では、上述の分析と考察を踏まえた上で、本研究の目的を解明するために、正答率とインタビュー調査に対する総合的な考察を行った。

学習者の習得状況について、生成も知覚も NCW の習得は CW より不十分であるという結果が見られた。その原因は以下の二つが推測される。①NCW 語の習得は CW 語より遅れている。②NCW 語は CW 語より習得が困難である。インタビュー調査の結果から見ると、既に高度な日本語発音知識を持っている協力者 A は NCW の発音について自分の判断方法があるに対し、アクセント知識が殆ど把握していない D は CW と NCW にかかわらず、CAR を適用したアクセントで発音する傾向が強いと見られる。つまり、発音知識の獲得過程で先に NCW 語を全部 CW 語として発音を習得し、NCW 語のアクセントはその後徐々に習得していくという仮説が立てられる。更に、この過程で NCW 語の誤ったアクセントが定着し、習得がより一層困難になっていくとも考えられる。

複合名詞アクセントの判断方法について、協力者 4 名はそれぞれ各自の複合名詞アクセントの判断方法があると分かったが、判断方法の信頼性は異なっている傾向が見られた。アクセントについての明示的知識を持っている A と B は、自分の知識を基に、CAR 適用かどうかを判断している。それに対し、C と D は CAR の適用ではなく、英語のストレスを適用した。その原因については、日本語の学習より早い段階で、英語の学習が始まっており、第二言語の英語発音規則を一般化し、同じ第二言語である日本語 に適用してしまうと推測する。A と B も英語の学習がより早いが、日本語に音声知識が習得され、英語との異同が気づいているからであると考える。

意味関係についての意識については、A と B は意味関係についての意識について、判断の手がかりの一種として語っていた。A は一部の語に対し、CAR を適用しなければ「切り離されている」感覚を語り、他の語は CAR を適用しなくても「切り離されている」感覚がないことを理由で、ほとんどの CW と NCW 語を分けられている。B は「意味の結束性」を主な判断基準として直接 CAR 適用かどうかと関連している。まず結束性があるかどうかを判断して、あれば CAR 適用、なければ適用しないという規則でアクセントを判断している。それに対し、C と D は意味についての意識はほとんど現れていない、韻律的な特徴を適用として判断している。このような意味についての理解が学習者の複合名詞アクセントの判断に有利な影響があると推測している。

ほかに、4 人のインタビュー調査結果から、同じく「語感」という概念が抽出された。「語感」による推測結果を見ると、日本語からのみならず、中国語、つまり母語からの語感の影響も見られるため、「語感」は、目標言語のみならず、学習者の第一言語、ほかの第二言語からの影響がある可能性もあると推測する。

第7章　結論

第 7 章では、本研究のまとめ、意義及び今後の課題について述べた。

まず本研究の RQ に対する回答を示した。

RQ1：全体的に生成と知覚の習得が全くない協力者はいなかった。生成と知覚の習得状況を分析したところ、差がないことが分かった。その次に CW と NCW の習得について、習得の差があり、NCW の習得が CW より遅れており、且つ困難であることが分かった。

RQ2：インタビューデータを SCAT で分析した結果、＜発音学習＞と＜発音を判断する方法＞という二つのカテゴリーについてテーマ・構成概念を抽出した。

＜発音学習＞は、協力者のアクセントについての知識の把握状況と経歴について述べた。主に【発音の練習方法】と【把握している発音知識】について、協力者の判断方法の由来や根拠を挙げた。

＜発音を判断する方法＞について、主に［意味に関する手がかり］と［意味以外の手が

かり］に分けている。［意味に関する手がかり］は、主に【意味の結束性】、【アクセントが意味への影響】、【意味がアクセントへの影響】についてAとBから抽出された。【意味の結束性】は語が一つのまとまりになっているかどうかを判断し、アクセントを判断する。［意味以外の手がかり］については、4人共通しているのは、主に「語感」と日常生活での「接触頻度」の影響が抽出された。CとDは、【英語のストレスの適用】が現れ、「ストレス」という韻律構造上の考慮によってアクセントを判断している。

RQ3：AとBは［意味に関する手がかり］の下位カテゴリーが抽出され、【意味の結束性】を考慮し、前部要素と後部要素の意味が一つのまとまりになっているかを意識して複合名詞アクセントを判断したため、意味関係について意識できている。CとDは、意味に関する考慮はなかったため、意識していないことが分かった。

RQ4：AとBが意味関係について意識しており、意味上の意識で複合名詞アクセントを判断する。意識を巡り、体系的な判断方法を立てることができている。且つ、その方法は窪薗（1995）が言及した「意味制約」と完全一致ではないが、少なくとも接近している。それに対し、CとDは意味上の考慮はなかった。英語の強弱アクセントの表記方法で日本語アクセントを判断し、例外が多くなり、体系的な判断方法がない。そのため、意味関係についての意識が複合名詞アクセントの判断方法の築きにとって有意義な手がかりの一種となり、アクセントの判断に有利な影響がある。

そして、本研究の意義について、意味が複合名詞アクセント習得においての重要性とNCWのアクセント指導の重要性について述べた。意味がアクセントの習得について有用なものとなり、複合名詞アクセントの指導に「意味」という観点を導入し、学習者に「意味」と「アクセント」との関係を重視する意識を喚起できれば、正答率が低いNCW語のアクセントの習得も改善できる機会をもたらす可能性もあると考えるべきである。また、NCWの正答率がCWより有意に低い原因はNCW語の習得はCW語より遅れている且つ困難であることを考え、最初からCWと同時に導入し、同様の重要性と扱って指導を行うのがこの苦境を改善する道の一つではないかと考える。

今後の課題として、学習者の意味関係についての意識がJLPTのN1以外の段階での影響、さらに各段階においての発達プロセスが明らかになれる縦断的研究が必要となると

考える。また、「意味」を重視する具体的な指導法、教室指導で「意味」という観点の導入とその指導の効果を検証することも今後の課題として考える必要がる。

参考文献

秋永一枝（2014）『新明解日本語アクセント辞典　第二版　CD 付き』三省堂

窪薗晴夫（1987）「日本語複合語の意味構造と韻律構造」『アカデミア．文学・語学編』43号 pp.25-62

————（1995）『語形成と音韻構造』くろしお出版

高見澤孟・伊藤博文・ハント蔭山裕子・池田悠子・西川寿美・恩村由香子（2004）『新・はじめての日本語教育基本用語事典』アスク出版

田中真一・窪薗晴夫（1999）『日本語の発音教室　理論と練習』くろしお出版

陶俊（2016）「中国人日本語学習者のアクセント・イントネーション理解力が発音運用能力に及ぼす影響」『言語文化共同研究プロジェクト』pp.49-59

長野正（1995）『日本語の音声表現』玉川大学出版部

松森晶子・新田哲夫・木部暢子・中井幸比古（2012）『日本語アクセント入門』三省堂

柳悦（2008）「複合名詞アクセントの知識と聞き取りの習得―中国北方方言を母語とする日本語学習者への追跡調査―」『日本語研究』28 巻 pp.17-29

劉佳琦（2011）「中国語母語話者（北京・上海出身者）による複合動詞の東京語アクセントの習得」『早稲田日本語教育学』8・9 号 pp.15-28